

常識家の非常識

萩原朔太郎

青空文庫

僕等の如き所謂詩人が、一般に欠乏してゐるものは「常識」である。この常識の欠乏から、僕等は常に小説家等に輕蔑される。それで僕等自身もまた、その欠点を自覺してゐることから、常に常識的なものに畏敬し、常識学の修養につとめて居る。

この意味から、僕は常に「文藝春秋」を愛読してゐる。文藝春秋といふ雑誌は、文壇稀れに見る「頭脳あたまの好い雑誌」であつて、編輯がキビキビとして居り、詰将棋の名手を見るやうな痛快さがある。しかしそんなことよりも、この雑誌の特色はその常識学の徹底にある。常識とは何ぞや、常識的精神の価値とは何ぞやといふことを、もし真に知らうとする人があるならば、先づ文藝春秋

を読むが好い。それで僕は、ずっと前からこの雑誌を「常識のメンタルテスト」として、一種の特別な敬意を表してゐた。丁度僕のこの敬意は、我々詩人が時に小説家に対して抱く所の、或る種の畏敬と同じ性質の者であつた。

所が偶然にも、最近この文藝春秋の記事からして、僕の常識に対する見解に大なる動揺が生じて来た。すくなくとも僕が、従来「常識の価値」を高く買ひかぶりすぎたことに気がついて来た。と言ふわけは、最近この雑誌の文藝春秋子が、二回に亘つて書いた僕の毒舌を読んだからである。もちろん僕は、雑誌の六号記事がゴシツプ的に書く漫罵なので、神経質に抗議する男ではない。此所に言はうとするのはそれでなく、小説家的常識の価値（それ

を小説家は常に誇つてゐる）が、案外くだらぬ安物にすぎないことを、それによつて初めて知つたからである。

文藝春秋の六号子は、前に僕の書いた芥川龍之介君の追悼文で、僕を無理解に悪口し、第二の島田清次郎にたとへてゐる。春秋子の理解によれば、僕のあの文（改造所載芥川龍之介の死）は、芥川君に対する冒瀆であり、自己尊大であり、故人を恥かしめたものであるさうだ。それを読んだ時、僕は世にも意外な読者があるものだと思つて、自ら事の意外に呆然とした。僕は芥川君を詩人でない——詩を熱情する小説家だ——と言つたけれ共、それが何等芥川君に対する侮蔑でなく、反対に高い程度の尊敬と愛情とで、あの人の悲壮な精神に感激を込めた言であるのは、常識を有する

限り、だれでもあの文章の読者に解る筈だ。僕は文藝春秋子の毒舌をよんで先づ「常識家の非常識」といふことを考へた。

所が二月号の同じ雑誌に、同じ文藝春秋子がまた僕の毒舌を、僕の新潮所載の文（室・生・犀・星・に・与・ふ）について書いてる。それによると、僕のあの文章は室・生・君の旧悪をあばいたもので、故意に友人を陥入れ、他人の過去を恥かしめ、以て独り自ら正義を売らうとするものであるさうだ。何たる意外の言だらう。之れにもまた僕は呆然としてしまった。僕にとつてみれば、室・生・君の過去は一の英雄的生活であつた故に、その回想を書くことは、友の伝記における讚美であつた。僕はあの文章の前半を、伝記記者の熱情と讚美で書いた。そしてその精神は、常識を有する限り、どんな

読者にも解る筈だ。僕は室生君に対して、自己と容れない人生観を争ひ、あくまでその抗議を提出したけれども、かりにもあの文章をよんだものは、その精神が親友に対する熱愛に充ちてることを知る筈だ。他のことはとにかく、あれが友人を陥入るための女らしい邪智の悪意で書いたものと解されては、僕として到底がまんできない。世に之れほどひどい曲解があるだらうか。況んやそれによつて僕が正義を売るとは何事だ。いかに六号記事とは言ひながら、之れほどひどく曲解されては、遂に黙つて居られない。僕は今迄、自分の書いた詩論や感想が、他から誤解されたことがしばしばあつた。しかし最近文藝春秋子に書かれたほど、自分の文が意外な誤解を受けたのは始めてだ。何故に、どうしてこれ

ほと思ひがけない、不思議な曲解的な意味に、いつも僕の文章が取られるのだらう。僕はその不思議を考へた。そして結局、一つの或る発見に到達した。即ちそれは、文藝春秋子（及び之れによつて代表される常識的聰明人の一般）が、僕等の文学の本質たる「詩」を理解できないからである。

前の芥川君の追悼文でも、今度の室生君への公開状でも、僕の記事の本質となつてゐるものは、常に「詩人の感情」であつて「小説家の感情」でない。換言すれば、あれらの文章の根柢となつてゐるものは、一の主観的な切実の訴へである。僕は小説家のするやうに、それによつて他を描くのではなく、自分自身の詩を訴へてゐるのである。例へばあの芥川君の追悼文で、僕が何を熱情し、

何を人生について憂鬱し、且つ欲情し、且つ訴へ嘆いてゐるかを、あれについて読み得る読者は、僕の「詩」を知り得たのである。そして僕の文章から常に、僕の詩を読み得るものは、僕の眞の理解者であり読者である。反対に、僕の詩について心を触れ得ず、詩の精神を理解できない所の人にとつて、僕の文章は不可解であり、時には全く意外なる、反対の意味にさへ曲解される。

文藝春秋子の意外な誤解が、結局してこの点にあることがはつきり解つた。文藝春秋子（僕はそれを以て常識的聰明人の代表と見る。）は、常識的な限りに於てのみ、聰明な正しき批判を有してゐる。だが「詩」の精神は、常に常識の上に立脚してゐる。

僕等が詩を思ふ時は、常に常識を一步踏みはづし、日常生活の

「健全なる判断力」を、どこかで取り落して居るのである。小説家的聰明さ（即ち常識）では、決してどんな詩も作れはしない。否さうした頭脳の中には、詩情そのものが宿らないのである。だからその種の人々には、小説家の書いた文章は解るけれ共、詩人の書いた文章は解らないのだ。そして此所に詩人といふのは、もちろん僕ばかりでなく、一般の詩人についても言ふのである。

かうしたことによつて、僕は常識の価値が甚だ疑はしくなつてきた。常識的聰明は、結果して常識の程度しか理解できない。だから詩人の仲間にとつて「常識ですら」解るものが、しばしば彼等にとつては常識ですら解らない。してみれば常識的聰明といふこと（今の小説家等が唯一の得意とするのはそれである。）は、

必しも僕等にとつて恐ろしいものでない。否むしろ低級視さるべき、愚劣な馬鹿馬鹿しいものである。僕は「常識のメンタルテスト」文藝春秋子から悪口されて、始めて常識の実価を知つた。すくなくとも今後の僕等は、常識及び常識的聰明者に対して、詩人らしき内気な恥らひと屈辱とを捨て、もつと大胆に、彼等を侮蔑してかかるであらう。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆 別巻76・常識」作品社

1997（平成9）年6月25日第1刷発行

底本の親本：「萩原朔太郎全集 第八巻」筑摩書房

1976（昭和51）年7月

入力：渡邊 つよし

校正：門田 裕志

2001年9月27日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

常識家の非常識

萩原朔太郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>